

鹿児島の地質36 **サンゴや有孔虫が作る造形美** 地質担当 鈴木 敏之

奄美諸島では、地殻変動や海水面の変動で隆起したサンゴ礁が陸上で見られます。これらは十数年前の比較的温暖な時代につくられ、その後、隆起したものです。主にサンゴや貝、有孔虫の殻などからなり、琉球石灰岩とよばれています。今回は、様々な作用を受けて長い年月をかけて作り出された奄美諸島の特徴的な石灰岩の地形や地質を紹介します。

まず、奄美諸島の海岸近くの石灰岩が分布する海岸部では、波や季節風の侵食作用によって崖(海食崖)が形成されます。その海面付近には波によって石灰岩にくびれ(ノッチ)ができ、きのこの形のように見えるものがあります。このくびれの部分はかつての海水

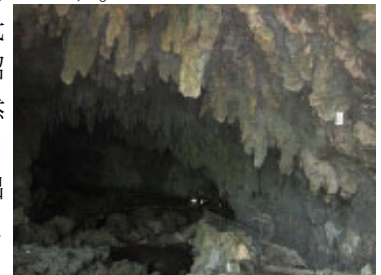


きのこ岩(ノッチ)
(知名町ウジジ海岸)

面にあたり、侵食され、その後の地殻変動で海面上に姿をあらわしました。知名町(沖永良部島)のウジジ海岸では、きのこ岩が立ち並ぶ特異な景観が広がり、観光地となっています。

また、沖永良部島や与論島などの隆起サンゴ礁の島々では、島を覆う石灰岩が雨水の影響で侵食されたカルスト地形が見られます。沖永良部島田皆岬では、かつては石灰岩の一種トラバーチンが切り出され、各地で石材として利用されています。さらに、地下には石灰岩が地下水の作用で溶け出してできた大規模な鍾乳洞が発達します。

沖永良部島の代表的な昇竜洞は昭和47年に県の天然記念物に指定され、自然が作り出した芸術を見ることができます。



昇竜洞入口(知名町大山)

鹿児島の植物52

波が運ぶ命 漂着種子

植物担当 寺田 仁志

名も知らぬ 遠き島より 流れ寄る 椰子の実ひとつ。

島崎藤村の詩に詠まれた椰子の実は愛知県の海岸に漂着したココヤシです。ミクロネシアなどの南太平洋の島々から長い航海を経てやってきたものです。日本に至るまでに発芽能力は失われており、日本には自生地がありません。石垣島や奄美大島でもその種子が発芽することはありますが、定着までは至らないようです。

植物の種子は子孫の生きていく場所を広げる(分散)ために種子を風に託すもの、動物に付着するもの、動物に食べられ糞となるもの、落ちて広がるものなど様々な方法をとっています。

亜熱帯の島々では、サンゴ礁があるため波が穏やかになり、植物たちの生育地が圧倒的に海に近くなります。このため種子が落ちて広がる植物の中には落ちた後さらに波の力によって分布を広げるものもあります。

潮間帯(干潮線~満潮線の空間)の森であ

るマングローブをつくるヒルギ類は潮の流れを分散に利用する植物の典型です。予め母樹についているうちに発芽し十分に成長して苗となって落下します。

ハマオモトは白い花を咲かせた後、球状の果実ができますがその中に4~6個のスポンジのような、径が2 cm程度ある種子をつくりまします。サキシマスオウノキもウルトラマンの顔に似た7 cmもある果実をつくって落ちまします。

これらの種子や苗の特徴は長期間の漂流に耐えられるよう、果実や苗が大型で、抵抗の少ない流線型や球形です。また、外皮は強靱な繊維で覆われたりスポンジ状になって内部を保護しています。



漂着後芽生えたココヤシ